中國の孔子批判に關する諸問題

吉原英夫

一　はじめに

一九七三年の八月から中國で開始された孔子批判運動は、劉少奇・林彪などに關する政治問題をも含めた批林批孔運動に接續し、さらに儒法鬪爭史觀による歷史と歷史人物の再評價、中國思想史の再編成へと擴大し、七六年春ごろから「走資派批判」「鄧小平批判」が始まるまで、三年有餘にわたつて繼續、展開された。(注1)

本稿では、批林批孔運動と一括して呼ばれるその一連の動きのいわば「原點」である孔子に對する批判だけに問題を限定し、まず今回の孔子に對する批判の論理と見解を要約し、次にそれが解放後の孔子評價史の中でどのような位置を占めるのかについて中國古代史の區分問題と絡めながら簡單に觸れ、さらに今回の孔子批判の論理と主張の問題點を魯の三家ならびに「論語」における「人」と「民」の解釋の二論點を取り上げることによつて具體的に檢討してみる。

二　孔子批判の論理

いくつかの伏線を置きながら、(注2)楊榮國の人民日報論文(注3)を起點として中國の孔子批判運動は開始された。楊榮國がそこで提起した孔子批判の論理と見解は次のようなものである。

楊榮國は、後述するように郭沫若說を踏まえて春秋戰國期は奴隷制から封建制への過渡期であると押さえ、孔子評價の基軸を設定する。次に、孔子が、イ魯國の「新興勢力の代表」である季孫、孟孫、叔孫の三家の勢力弱體化を企圖した、ロ「齊國の新興勢力の代表」田成子が「齊國の奴隷主貴族の頭目、齊簡公を誅殺した」ことに反對した、ハ「刑鼎を鑄る」ことに反對した、ニ「魯國の著名な革新派」少正卯を殺害した、の四點を根據として「孔子は日ましに崩壞しつつある奴隷制の側に頑迷に立つて新興の封建制改革に斷固反對した」とその政治的立場を規定する。こうし

て孔子を奴隷制擁護の立場に立つという枠組みに入れ、その範圍内で「論語」にみえる孔子の思想を分析、批評する。[注4] たとえば「恕」について、「孔子が『恕』を提唱したのは、奴隷に對して寛恕を實行するよう求めたのではなく、すでに沒落した奴隷主に對して寛大な道を實行するよう求めただけだ」と言う。そして「孔子の思想は、すべてまさに崩壞しつつある奴隷主貴族階級の利益に服務するものであつた」と結んでいる。

要約すれば、春秋戰國期は奴隷制から封建制への過渡期であり、孔子は沒落しつつある奴隷主貴族の立場から奴隷制を擁護し、新興の封建勢力に反對した反動思想家である、ということになる。孔子に對する楊榮國のこの見解は、中國の他の孔子批判論者にも受け繼がれており、今回の孔子批判の基本的見解と言えよう。

三　古代史の區分問題

楊榮國の論理からわかるように、中國での孔子評價は、まず孔子の活動した春秋末期がいかなる性質の社會であつたかを確定し、それによつて革新と反動の評價基準を設定し、それではそういう時代に孔子はいかなる政治的立場に立つていたか、その思想はどの階級に奉仕するものであつたかと展開していくのが一般的である。從つて古代史の區分問題を不問にしたまま中國の孔子評價について語ることはできず、そこでまずその問題に觸れてみる。ただこの問題は長期間、しかも多くの論點にわたつて展開されたので、ここではその內容にまで立ち入る餘裕のないことを斷わつておくが、その論點を要約すれば、奴隷制から封建制への移行の時期をどこに置くかを通じて中國古代社會の構造をどう把握するかということ、具體的には西周を奴隷制とみるか封建制とみるか、奴隷制とみた場合には封建制への移行の時期をどこに置くかということであつた。[注5]

中國で最初に古代史の區分を試みた郭沫若は、一九七二年に自說の轉變について次のように述べている。「私は奴隷制の下限については說を三回變えた。最初は二つの社會制度の交替期は西周と東周の交、つまり紀元前七七〇年前後と考えた。續いてこの見解を改め秦から漢への移行期、つまり紀元前二〇六年前後であるとした。一九五二年になつて『奴隷制時代』という論文を書き、奴隷制の下限は春秋と戰國の交、つまり紀元前四七五年であるとした」。[注6] そしてこの「奴隷制時代」で提出した自說を七二年という時點で再確認し、[注7] 楊榮國らはこの區分論を前提として孔子批判を展開しているわけだが、奴隷制の下限を春秋と戰國の

交に置くこの郭沫若説がこれまで定説として承認されてきたわけでは決してない。

五六年に出版された區分問題に關する論文集[注8]の「編者のことば」には「奴隷制から封建制への移行の問題は、歴史科學の中の最も複雑な問題の一つである。現在、この問題はまだ解決していない」と總括されており、參考のため、この論文集から春秋戰國期を奴隷制から封建制への移行期とみなさない説の結論のみを列擧してみると、西周から初期封建社會（范文蘭、徐中舒）、春秋戰國期は封建社會（楊向奎）、春秋戰國以後まで奴隷制（黄子通）、西漢末まで奴隷制（周谷城）、兩漢も奴隷制（王思治、童書業）という具合いである。一九五五年に來日した歴史學者翦伯贊は、西周を封建社會とする立場に立つが、そのレポートの中で、西周を奴隷制とみる説と封建制とみる説との論點を丁寧に紹介し、「だがこの二つの説は、なお多くの人々に普遍的に受けとられてはいません[注9]」と表明している。ちなみに一つの文獻目錄[注10]の「社會性質」の項目だけによつても、一九五〇年から五九年までの間にこの問題に關する論文が一三〇餘篇あることが確認され、問題解明のために長期的で粘り強い努力が續けられていたことを垣間見ることができる。さらに范文蘭は六四年という時點で西周からすでに初期封建社會であるという從前からの自説を確認しており[注11]、郭沫若の論が必ずしも定論となつていたわけではないのである。現に郭沫若自身も七二年の前掲論文で、「殷代以後、問題は複雑になる。ある同志はすでに封建社會に入つており、奴隷制と封建制の交替期は殷と周との交、つまり紀元前一〇六六年前後であるとする。また、少なからぬ同志達は西周あるいは周代と周代以後までも奴隷制社會であるとする[注12]」と異説の存在を認めているのである。

ところが、七二年に郭沫若のその論文が發表され、それを「代序」とする舊著「奴隷制時代」が七三年五月に再版されると、その時代區分論を伏線として楊榮國らの一連の孔子批判論文が發表され始めるということになる。つまり今回の孔子批判は、西周封建社會論をはじめとする、春秋戰國期を奴隷制から封建制への大變革期とみなさない見解を無視し、切り捨てることによつて成立の基盤を獲得していると言えよう。

四　解放後の孔子評價

これまで述べたような時期區分論と關連しつつ、解放後の中國で孔子がどのように評價されていたか紹介してみる。ただ解放後の孔子評價をめぐる動向については、すで

に高橋均氏の丁寧な紹介があり、[注13] 私自身も馮友蘭の所説を中心に紹介したことがあるので、[注14] ここでは春秋期を奴隷制から封建制への移行期であるとする時期區分説に立脚する孔子論のみを取り上げる。

郭沫若は「十批判書」において奴隷制と封建制の交代期を秦と漢の交とみなし、孔子を「當時の社會變革の流れに順應」[注15]した思想家であると控え目に評價していたが、前述したように論文「奴隷制時代」では、時期區分を春秋と戰國の交まで引き上げることを背景に、孔子が、大奴隷主の階級支配を強固にするための「天」を承認しなかつたこと、一種の平等な觀念である「仁」ならびに私有財産を保障する考えである「義」を主張したことを理由として、孔子は封建制推進の理論的指導者であるとその評價を押し進めた。[注16] 今回の孔子批判運動の中ではその郭沫若の孔子評價はまつたく觸れられず、時期區分説だけが切り離して取り上げられているわけである。

一方、楊榮國は、これとまつたく反對に「孔子の思想體系は保守的な面があり日ましに崩壞していく種族統治を擁護するもの」[注17]で、「孔子の仁は當時の王公大人と士大夫を包括するだけで、孔子は仁を當時の王公大人と士大夫を團結させるだけの中心的なものとした」[注18]と述べていた。楊榮國に關して言えば、「簡明中國思想史」(六二年)においても同様な見解を表明しているので、[注19] 今回の孔子批判運動の中での主張をも含めて、その孔子に對する見方は終始一貫していると言える。

郭、楊二人の兩極的な評價の中間に位置づけられるものとして、侯外廬の評價がある。侯外廬は、孔子の思想は沒落した氏族貴族の利益を代表したが、自由民の擡頭によつて一定の讓歩を餘儀なくされ、その思想は客觀的には進歩的要素を備えるという矛盾した折衷的なものであるとする。[注20] 馮友蘭も侯外廬と同様な評價であるが、その思想の矛盾性を孔子が代辯した階級が「奴隷主貴族から轉化してきた地主階級」[注21]であることに求め、その立場に對應してその思想は改良主義思想であるとし、たとえば仁は「支配階級が人民に對して搾取を輕減し、人民に對して若干の恩惠を施こす」[注22]よう主張するもので、進歩的意義があると評價する。

孔子に對する楊、郭のような兩極的な見方と、侯、馮のようなその中間的な見方との三系列は、六〇年代に入つても引き續き存在した。六〇年から六二年にかけて展開された孔子哲學討論の中で發表された論文を收錄した「孔子哲學討論集」[注23]をみても、同一の時期區分説に立脚しながら孔

子評價に關しては、イ奴隷主階級の思想（任繼愈、關鋒、林聿時、趙紀彬、楊榮國、夏基松）、ロ奴隷主から轉化した封建地主階級の思想（馮友蘭、湯一介）、ハ新興地主階級の思想（安作璋、王先進、晁松亭、鍾啓鵬）という三系列に分裂している。

以上、孔子論の一部分をみただけでも多樣な見方の存在を確認できるが、このように從來は複數の學說の中の一つとして存在していたイの系列の說が、七三年ごろを境に突如として中國での孔子に對する唯一の見方となり、楊榮國、任繼愈、趙紀彬らの著作が再版されるということになつた。(注24) つまり現在の孔子像は、異なつた評價相互の間で食い違いを確認し合い、相互批判を通じて分析方法や見解を深化發展させた結果として成立したのではないわけで、そこに今回の孔子批判が獨善的で說得力に缺けたものとなつている一つの理由がある。

五　魯の三家に關する問題

上述した全體的な事柄を踏まえて、具體的な問題について考えてみる。二で述べたように、楊榮國は四つの理由を提示して孔子を奴隷制擁護の側に立つ思想家と斷定しているがそのうち少正卯を誅した問題と「刑鼎を鑄たこと」に反對したという二點については、すでに重澤俊郎氏がすぐれた分析を加えているので、(注25) 以下では魯の三家をめぐる問題について考察してみる。

楊榮國は「左傳」の記述に依據して、魯の三家（季孫、孟孫、叔孫）は「新興勢力の代表であつた」と次のように述べる。「紀元前五六二年、彼らは『公室を三分し』、季孫氏が徵稅という新制度を採用した。それから二十五年後、さらに『公室を四分し』たが、今度は孟孫、叔孫も季孫と同じように徵稅制度を採用し、生產關係を改變した。これは發展しつつある封建制の、崩壞しつつある奴隷制に對する挑戰であり、進步的な行爲であつた」。(注26) そしてこの三家に對して孔子は「あらゆる方法を講じて三家の弱體化をはかり、魯國公室の奴隷主支配を擁護した」(注27) から、從つて孔子は奴隷制擁護の側に立つていたとする。

まず、公室三分について觸れてみよう。楊榮國が依據した公室三分についての「左傳」の記述は次の通り。「三分公室、而各有其一。季氏盡征之。叔孫氏臣其子弟、孟氏取其半焉。」（昭公五年）。楊榮國はここにみえる「征」を「徵稅」と解釋しているわけであるが、それは無理である。いま引用した昭公五年の記述は襄公十一年の記述を要約したもので、そこには「三分公室、而各有其一。三子各毀其

乗。季氏使其乗之人以其役邑入者無征、不入者倍征。」（襄公十一年）と記されている。これは、「公室」すなわち郷の土地と人民を三分し、三家それぞれが自分の領有とした。季孫氏は「乗の人」が自己に臣従する場合は「公征」（杜注による）を免除し、季氏に臣従しない場合は「公征」を二倍にし、そうした恩恵を與えることにより國人を自己の私臣としようと企圖した、ということである。そしてこの事態を要約したのが昭公五年の「季氏盡征之」の「征」であるわけだ。また「征」「臣」「取」は並列して使用されていて、「征」は「臣」「取」と同一方向の意味を有する言葉であること、國人を自己の私兵とすることを「各征其軍」（襄公十一年）と言つていることを合わせ考えると、「征」とは公の領有していた郷の人民を、自己の私臣とすることと考えられる。従つて、これを根據として「徴税」を實施したと言うのは無理であるし、まして「季孫氏は分割して入手した奴隷を解放し、土地は小作に出す方法をとり、解放された奴隷に小作料をとつて貸しあたえた」[注28]などと言うのは飛躍もはなはだしく、空想の産物にしかすぎない。公室三分の歴史的意味は、「徹底的に國人に恩惠を與えることによつて、公との關係をたち切らせ、自己の私臣とすることを斷行したのが、魯の三桓氏の場合である」[注29]ということであり、それは進歩的、變革的意味を持つものではなく、あくまで「魯の支配氏族集團の名目的中核であつた魯公に代つて、三桓氏がその實質的中心になつたというにすぎない」[注30]のである。

次に三都破壞事件に觸れてみる。楊榮國は「孟孫は成都を、叔孫は郈都を、季孫は費都を築いた。……孔老二はひそかに弟子である子路をそそのかして、叔孫氏の郈都と季孫氏の費都の城壁をとりこわさせた。ただ孟孫氏の成都だけは守りが相當堅固であつたため城壁をとりこわすことができなかつた」[注31]と述べ、このことによつて孔子は「三家の勢力弱體化をはかつた」と斷定するのである。

この論理の展開、つまり三家と三都との關係が一枚岩的なものであることを自明の前提として、三都破壞と三家の勢力弱體化とを結合し、従つて三都破壞は魯公室の復權につながるという考え方は、檢討を要する。當時の狀況をみてみると、これらの都を根據として、陽虎（定公五年、八年）、公山不狃（定公九年）、侯犯（定公十年）らが三家に叛しているように、三家と三都との關係はもつと複雜なものであつた。三都は三家の據城で、一應は三家が任命した宰が三家の意を受けて管理することになつていたが、「實質的には『宰』の自主管理に委ねられており」[注32]、また費宰

の南蒯が季氏に叛して費人の支持を得られず失敗したように（定公十四年）、宰の權力は邑人の支持を得てはじめて維持できるという構造的關連を持つていた。つまり宰は邑人の支持という條件の下に一定の獨自性を持ち、三家の支配が一直線に三都を貫徹していたわけではないのである。こういうことを考慮すると、三家は三都破壞によつて、以前から苦慮していた公山不狃らの反抗を處理し、都を根據とする同樣な反三桓的な叛を根絶することによつて三家の政治的安定化を計ろうと志向した、とみるのが妥當であつて、そうでなければ三家が墮三都に反對しなかつたことを説明することはできない。

渡邊卓氏は、この三都事件に鋭い分析を加え、墮三都についての「公羊傳」から「史記」への記述の變貌を、孔子が魯において誰に臣從したかを中心に辿り、司馬遷が孔子の主を季孫、あるいは哀公から、定公へと變化させ、それに伴つて墮三都についての話を操作したのは「皇帝權力確立のために豪族の抑壓を要請した時代精神と相互に呼應するものである」(注33)と結論している。そうしてみると、孔子と三都事件との關わり合いそのものにも問題があるわけであるが、この指摘を踏まえて考えてみると、本來直接的關連を持たないと推定される三都破壞と三家の勢力弱體化とを結びつけること自體が、君權確立主義的思考法でこの話を把握しようとする傾向に引きずられた結果であると言えよう。

結局、楊榮國の議論は、三家と三都との關係、それと孔子との關わり合いを、春秋末期という歴史的狀況の中で考慮せず、奴隷制に反對するのはすべて革新的、封建制に反對するのはすべて反動的という圖式を前提として、魯の三家を新興勢力とみなし、強引に孔子をそれへの反對者に仕立てることによつて孔子の政治的立場を決定するという、非歴史的、短絡的なものであると言えよう。

六　「論語」における「人」と「民」

中國の孔子批判は、「論語」以外の資料によつて孔子の立場をあらかじめ奴隷制擁護と規定し、その觀點から「仁」「義」「忠」などの「論語」にみえる孔子の思想を分折、批評するという倒立した方法を取つているが、「論語」そのものの分析として檢討に値するのは、「論語」にみえる「人」と「民」について「人」を奴隷主、「民」を奴隷とみなす見解である。この見解を一貫して主張してきたのは趙紀彬であり、楊榮國などもそれを受けて「孔子のいう『仁者は人を愛す』はまつたく人をだますためのうそで、それ

はすべての人（奴隷を含む）を愛すというのではなく、彼が愛したのはただ奴隷主階級だけであつた[注34]」と述べている。趙紀彬の著作「論語新探[注35]」は、日本でも「最近での『論語』に關する最もきめのこまかい研究[注36]」とか、「文字の訓詁についての考證がゆきとどいていて……その考證が、明確な歴史像によつて牽引され[注37]」とかの高い評價を得ているが、その「釋人民」篇を紹介してみる。

「節用愛人、使民以時」のように「『人』に對しては『愛』と言い、『民』に對しては『使』と言う」（三頁）[注38]。「人」に對して「使」と言う場合もあるが、それは「當時の『人』の階級内部での、政治的地位の上下の區別の反映である」（三～四頁）。この使用區別から「『人』は當時の支配階級、『民』は當時の被支配階級であることを確定できる」（五頁）と言う。この「人」と「民」の使い分けに對應して「誨」と「教」も使い分けられており、「『人』に對してだけ『誨』と言い、『民』に對しては『誨』と言わない」（七頁）、「『教』字は『民』を對象とする。かつ、教育を受ける者は『民』で、『民』を教える者は『人』である」（十頁）と言う。そしてこれらの使い分けから、「『人』は奴隷主階級、『民』は奴隷階級である」（十頁）と主張する。

その着眼と緻密な論證には敬意を表するが、その論證の過程には問題がある。自己の立論に都合の悪い用例を取り上げなかつたり、變更したりすること。たとえば、「有民人焉、有社稷焉」の「民人」について、これは「民」と「人」という二つの名詞であるとして扱わない。また「惠則足以使人」について「經典中の『民』の字は、唐代には太宗の諱を避けるため、『人』の字に改められたものが多く、ここはあるいはその一例であろう」（四頁）と推量して、この條の「人」は「本來は『民』であつたとする（四頁）。しかしもしそういう本文の變更を考慮するとしたら、「論語」を資料として「人」「民」の區別を問うという方法自體が問題となるわけである。

さらに、説明の矛盾した箇所。「忠焉能勿誨乎」について、「爲政編の『使民敬忠以勸』を除いて『論語』で言う『忠』はみな『人』に對して言つた」（七頁）のであるから、この條の「誨」の對象は「人」であるとする。それなら「子以四教、文、行、忠、信」についても、「忠」は人に對して言うのだから「教」の對象は「人」であるとするのが論理というものであるが、この條の説明では先ほど例外とした「使民敬忠以勸」を根據として、「教」の對象は「民」である（八頁）とする矛盾した説明をしている。

それらの恣意的な論證がなされる根本の原因は、趙紀彬

の取つた方法上の缺陥にある。つまり「論語」における「人」と「民」の相違を解明するのならば、「論語」における「人」と「民」の全用例を檢討して歸納するという方法をとるのが正道であるが、趙紀彬は、「使」「愛」「教」「誨」と關係する「人」と「民」のみに考察の對象を限定してしまつているのである。

「論語」全體の用例から考えると、先述した「民人」についても、「善人」「鄉人」「惠人」「佞人」などから「民と人」というのは無理な解釋であり、やはり「民の人」と解すべきである。他に「童子見……人潔己以進、與其潔也」(述而)から、「人」には「童子」が含まれることがわかるし、「吾之於人也、誰毀誰譽。……斯民也、三代之所以直道而行也」(衞靈公)から、「斯民者、今此人也」(朱注)と言うように、「民」と「人」を同義に使用していることがわかる。さらに「廐焚、子退朝曰、傷人乎」(鄉黨)のように「人」と「馬」を對比していること、「未能事人、焉能事鬼」(先進)のように「人」と「鬼」を對比していることを考えると、『人』は天地自然や鬼神・鳥獸に對立する人間一般[注39]」として使用されており、そこには「民」も含まれると考えるのが妥當な見解であろう。

七　結びにかえて

今回の中國の孔子批判の見解は、從前から存在していた異なつた見解を學問的な手續きを踏んで批判、止揚した結果、中國での孔子に對する支配的な考えとなつたわけではなく、異なつた見解を默殺し、排拆することによつてそうなつたと考えられる。それではこの時期に、他の見解を默殺、排拆することを必要とし、かつまたそれを可能ならしめたものは何かということになる。このことについては、林彪が孔子をもちあげたからそれに對抗するために毛澤東が示唆してとか、「四人帮」が黨と國家機關を簒奪するために利用したとかいう權力次元のことだけに性急に解決を求めるのではなく、それと絡みつつ、今回の運動に內包されている樣々な思想的、政治的な問題を取り出し、中國の動態の中で檢討する必要があると考える。たとえば、過渡期階級闘爭の理論の展開と定着、「中國近代においてブルジョア思想が孔子の權威や傳統思想を外皮として出てくるという思想史の問題[注40]」、孔子や孟子の言葉の類推から社會主義的道德について說明していた段階からの脫却の過程[注41]、大學改革を含む一連の教育改革等との關連について、中國の歷史の流れの中で檢討する必要があり、今後究明していきたいと考えている。

（都立府中高校教諭）

〔注〕

1 その經過の概略については、拙稿「『孔子批判』運動についての一考察」(「東京都高國研紀要」第十五集) 參照。

2 たとえば、洪世滌「秦始皇」(上海人民出版社 七二年五月)、郭沫若「中國古代史的分期問題」(「紅旗」七二年七期)、楊榮國「春秋戰國時期思想領域內兩條路線的鬪爭」(「紅旗」七二年十二期) など。

3 楊榮國「孔子—頑固地維護奴隸制的思想家」(「人民日報」七三年八月七日)

4 「論語」がどのように讀まれているかについては、拙稿「孔子批判覺書」(都立福生高等學校「研修の記錄」第三號) の『論語』批判」の項で紹介したことがある。

5 西嶋定生「中國古代社會の構造的特質に關する問題點」(鈴木俊、西嶋定生編「中國史の時代區分」東大出版會 五七年) 參照。

6 郭沫若「中國古代史的分期問題」(「紅旗」七二年七期)

7 再確認であつて次の文獻のように新說とみるのは誤りである。洪祖顯「中國の孔子批判運動について」(「道德と教育」七四年七・八月) 八頁、山田勝美「中國の批孔運動について」(「漢字漢文」六卷十六・十七號) 七八頁。

8 歷史研究編輯部編「中國的奴隸制與封建制分期問題論文選集」(三聯書店 五六年)

9 翦伯贊「中國史の時代區分の問題について」(注4、六三頁)

10 華東師範大學歷史系「中國古代及中世紀史報刊論文資料索引」(華東師範大學 五九年)

11 范文蘭「中國通史簡編」修訂本第一編 (人民出版社 六四年八月 四版)

12 注6

13 高橋均「解放後の中國における《論語》と孔子の評價論爭について」(「中國語」七六年十月)

14 拙稿「中國の孔子批判について」(第十三回全國漢字漢文教育研究會發表資料) の「古代史の區分と孔子評價」。

15 郭沫若「十批判書」(一九四五年) 邦譯「中國古代の思想家たち」上 (岩波書店 五三年、一二六頁)

16 郭沫若「奴隸制時代」ここでは人民出版社版 (五四年) を收錄した注8による。三九〜四二頁

17 楊榮國「中國古代思想史」(人民出版社五四年 七三年第二版) の「序言」(五二年)。

18 注17 一〇一頁

19 竹內實「同時代としての中國」(田畑書店 七六年) 一三五〜一三六頁

20 侯外廬主編「中國哲學史略」(中國青年出版社 五八年) 八頁

21 馮友蘭「中國哲學史新編」第一册修訂本 (人民出版社 六四年) 九五頁

22 注21 一一一頁

23 哲學研究編輯部「孔子哲學討論集」(中華書局 六三年)

24 楊榮國注17 任繼愈「中國哲學史簡編」(人民出版社 七三年十月)、趙紀彬「論語新探」(七六年三月)

25 重澤俊郎「楊榮國の『頑迷な妓隸制擁護の思想家—孔子』を評す」(「中國研究」七四年九月)

26 注3

27 注3
28 楊榮國「反動階級的聖人—孔子」（人民出版社　七三年十二月）八頁
29 增淵龍夫「春秋戰國時代の社會と國家」（「岩波講座世界歴史4」岩波書店　七〇年、一六五頁）
30 增淵龍夫「左傳の世界」（「世界の歴史」筑摩書房　六〇年、八八頁）
31 注28　十五頁
32 小倉芳彦「陽虎と公山不狃」（「中國古代政治思想研究」青木書店　七〇年、三一七頁）
33 渡邊卓「孔子説話の思想史的研究—去魯」（「古代中國思想の研究」創文社　七三年、六四頁）
34 注3
35 趙紀彬「論語新探」（人民出版社　五九年初版、六二年第二版、七六年第三版）
36 金谷治「論語の世界」（ＮＨＫブックス七〇年）六八頁
37 注19　一四二頁
38 注35一册本による
39 松尾善弘「『學而時習之』『仁者愛人』『有教無類』の解釋をめぐるいくつかの問題」（「中國研究」七四年八月、二八頁）
40 近藤邦康「思想史研究と文化大革命」（「講座現代中國Ⅲ」大修館　六九年、二〇三頁）
41 山口一郎「東洋思想と現代哲學」（「現代中國思想史」勁草書房　六九年、二四九～二五六頁）